

審査の結果の要旨

氏名 李 顯旺

個人が情報や知識に迅速にアクセスできる、個人がグローバルに他者とネットワークを築くことができる、世界各国のさまざまな諸機関に参加し出現した明確な目的を持つ強力な利益団体を形成するなど、インフォメーション・コミュニケーション・テクノロジー（Information Communication Technology、以後 ICT と略記）による無限の機会を認識しつつ、本研究では、地方自治体政府が提供する電子サービスと、その利用者であるサイバーコミュニティとの関係を分析した。マレーシア政府は、リエンジニアリングの過程で、公共および民間セクターを構築するために多額の資金を投入してきた。しかしその一方で草の根コミュニティを影に押しやってきた。本来、政府・私企業・コミュニティの第三セクターにおいては、ICT の持つ最大の可能性を認識できるよう、インターネット全体でもっと頻繁なトランザクションがなされるよう推進したり、電子政府のポータルサイトが順調に提供されたりしなければならないのだが、そうした体制を望むには、現在の草の根コミュニティは第三セクター協力体制においてきわめて弱体化している。

地方コミュニティが政府の電子サービスをもっと使用するような参与の仕方、また政策決定過程への地方コミュニティの参加がもっと表立って議論されること、また ICT 使用の公共サービス提供を増やすような政府の真摯な取り組みが必要である。これらの点を認識しながら、地方自治体の電子サービス実施の取り組みと、それに対する人々の反応を調査した。その結果筆者がたどり着いた結論は、新しい仕組みを創造するガイドラインもしくは提言とも見做せるであろうが、強力な草の根電子コミュニティを形作ることである。その電子コミュニティは、実質的な力を持ち、実際の行動に備え、あるいは時には国家の発展のために責任を負うような、政府や多国籍企業と同レベルの権限を持ってさえいるものである。

本研究は、ナショナル IT カウンシル（National IT Council、NITC）が開催したさまざまな電子公開討論の議論に参加して、過去 3 年のあいだに、本研究のテーマに関わる部署部局の公務員と意見交換することを通じ、また電子公開討論会において二年連続で最優秀論者に選ばれ、コタキナバルとマラッカで開催された InfoSoc マレーシア IT 会議への参加を通じて、マレーシアのネットワーク社会の電子化への準備対応性に関する基礎的な指標をはっきりと描くに足る最新情報を得ている。この最新情報とともに、さまざまな地方自治体がインターネット経由で電子公共サービス提供を実施しているその普及の状態を調べながら、いくつかの市議会を選んでそれらの公式ウェブサイトの設計を緻密に観察し、ウェブコンテンツ、利用者本位性、相互作用の提供具合、日頃のアップデートの状況、地域のイベントや観光情報そしてリンクなどの要素を調べ、インターネット使用においてより良質の情報を洗練されたレベルで提供する助けとなるかを考察している。

本研究は、さらに、クチン市のインターネットユーザを対象に一連のアンケート調査をおこなっている。クチンはマレー半島の ICT 発展地域からは遠く離れている。アンケート調査はクチン市のインターネットユーザに対しておこない、ユーザの使用パターンを理解し、さらに地方政府が供給している窓口の実際のサービスとウェブ上でのサービスに対する認識を、より詳細に理解することを目指した。実際に末端ユーザのフィードバックを得ている地方誌議会の電子サービス供給を比べながら、本研究ではサイバーコミュニティの電子化への準備対応性が現段階でどのように表現されているか明らかにし、そのユーザ側

の使用ならびに政府の電子公共サービス供給の双方がより成熟してゆくような、適切な解決法を提案した。

上記の参加型調査を通じて得られた本研究の結論は、地方的な電子政府プロジェクトの成功を左右する主要ファクターは、良質な情報と良質なインフラストラクチャーが利用可能であること、そして十分な訓練を受け適切な技術を持つウェブマスターあるいは IT 専門家が市議会の公式ウェブサイトの設計と構築を担うということである。さらに、サイバー空間では主権を唱える地域が現れるというユニークなモデルが競合したり、もっと重要なこととして、地域コミュニティの発展プロセスに貢献を担える積極的な新世代を育成するような、都市 - 地方関係が現在のマレーシアに現れて来たことなどを、今後の動きに関する重要な要素として指摘している。

本研究は、アジアの発展途上地域の地方都市における電子政府化課題を、マレーシアを事例として詳細に明らかにし、優れた学術的価値を有している。さらに、その分析を通じて今後の制度改善のための有益な提言を行っている。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。